451
かつら

文部省選定

歌舞伎の魅力

# かつらと床山

企画／監修：日本芸術文化振興会　国立劇場
製作：株式会社　桜映画社

＜16ミリ・カラー・34分＞
販売価格　245,000円(消費税別)

[製作意図]

登場人物の役柄や性格をピタリと決める鬘（かつら）。衣裳や隈取りなどと共に、歌舞伎の様式美を構成する重要な役割をもっている。

鬘は、17世紀の半ば頃、野郎歌舞伎の役者たちが、より女らしい表現をもとめて生みだしたものである。そして、歌舞伎の劇的内容が豊かになるにつれ、その時代の役者や鬘師の創意工夫によって、千数百種にも及ぶ現在の鬘の原型ができあがったのである。

映画では、歌舞伎の舞台や江戸時代の錦絵を見ながら、鬘によって変わる役柄と性格をわかりやすく紹介していく。さらに、鬘をつくる鬘師と床山の舞台裏での仕事を追い、役者の演技を引き立てたり劇的展開を助けたりと、歌舞伎の魅力の大きな要素となっている鬘の面白さを伝える。

[解　説]

歌舞伎の舞台から、立役や女方をみていく。凛々しい若侍。吹き輪、銀の四段前ざしのお姫様。戦乱を戦い抜いた侍大将を表現する水入り。

芝居の役柄や性格を決める鬘だが、その始まりは江戸初期の野郎歌舞伎からであった。女歌舞伎、若衆歌舞伎の禁止によって、前髪を落とすことを余儀なくされた野郎歌舞伎の女方が、置手拭で月代を隠したのが最初といわれている。

歌舞伎の劇的内容が豊かになるにつれ、多くの鬘が工夫された。より女らしい表現の必要から、まず女方の鬘が、そして立役にも役に応じた鬘が使われるようになっていく。その種類は、女方で四百種、立役では一千種にも及ぶ。これを完成させたのは、江戸末期の名鬘師・友九郎であった。こうして、鬘の工夫は、役柄の表現を著しく広げていった。

歌舞伎役者の鬘は、鬘師と床山との分業で作られてきている。

まず、鬘師は、銅板から型をとって台金を作る。この方法は、友九郎以来、変わっていない。公演の合間をぬって、床山と鬘師で、次の演し物の鬘合わせが行われる。役者から細かな注文が出されると、鬘師が手早く寸法をとり、すぐに台金を修正していく。この職人の技が伝統を支えてきた。

大切な生えぎわの感じをだす「羽二重通し」は、鬘師の手仕事。この優れた技術も、友九郎によって工夫された。できた羽二重を台金に貼り付け、ザンバラ髪のまま、床山に渡される。

床山は、立役と女方に分かれている。立役の床山が髪を結い上げていく。何十年経験してもこの道に終点はない、と床山さんは言う。

開演直前の楽屋では、立役の着付けが進んでいる。衣裳を着終わったと同時に、間髪を入れず鬘をつける。この呼吸が舞台の緊張感を高める、と床山さん。

鬘は、すべて一つ一つ手作りで作ることで、数多い役柄を的確に表現することを可能にしている。そして、精巧な鬘によって歌舞伎の表現を豊かにする創意と工夫が、これからもさらに続けられていくであろう。

[協　力]　東京演劇かつら株式会社
東京鴨治床山株式会社
有限会社　光峯床山

[資料協力]　東京国立博物館
早稲田大学演劇博物館
向井　信夫

[演　目]　鎌倉三代記　八重桐廓噺　身替座禅
碁太平記白石噺　日本振袖始

[製作スタッフ]
製作：村山和雄
脚本／演出：大島善助
撮影：黒柳　満
山屋恵司
村山和雄
照明：水村富雄
編集：（ポジ）岸　眞理
（ネガ）井上孝子
録音：アオイスタジオ
解説：山川建夫